

# 公文書館だより



## 特定重要公文書紹介 旧札幌控訴院工事関係資料

札幌の中心部、大通公園を西の端に向かって進んで行くと、やがて庭園越しに、小さな尖塔と車寄せ、その左右に並んだ屋根窓と縦長窓が印象的なファサード(建物の正面)が見えてきます。旧札幌控訴院(現・札幌市資料館)は、大正時代の面影を残す希少な空間として、今も市民や観光客に親しまれています。札幌市公文書館には、この庁舎の約100枚に上る詳細な設計図や建築書類などが、特定重要公文書として収蔵されています。

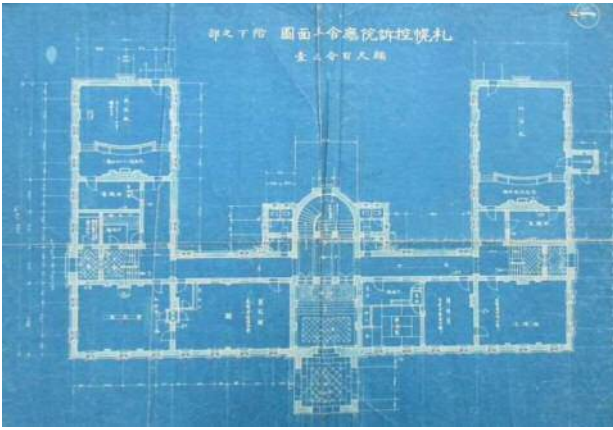
控訴院は、明治19年(1886年)から昭和22年(1947年)まで各地に設置されていた司法官庁で、現在の高等裁判所に相当します。でも、なぜ、市の公文書館に裁判所庁舎の設計図があるのでしょうか？

北海道では、当初、函館に控訴院が置かれていましたが、大正10年(1921年)、札幌に移転し、札幌地方裁判所の庁舎の一部を仮庁舎として開庁しました。当公文書館に収蔵されている、同年の札幌区会議事録を読むと、控訴院の移転について、当時の札幌区(現在の札幌市)側から国に対し

て、費用や用地の提供を申し出るなど、積極的な働きかけがあったことが分かります。

札幌控訴院の庁舎は、第一次世界大戦後の不況や関東大震災の影響などもあって、大正15年(1926年)に、ようやく完成し、戦後も長く裁判所として使われました。昭和48年(1973年)、裁判所が近隣の新庁舎に移転することになり、旧庁舎の解体が検討されましたが、歴史的な建物の保存を求める声が上がリ、札幌市が、国から所有権を取得しました。設計図や書類も、その際に引き継がれたと考えられます。そして、裏側の附属庁舎を取り壊し、本庁舎を活用して、資料館を同年に開館しました。



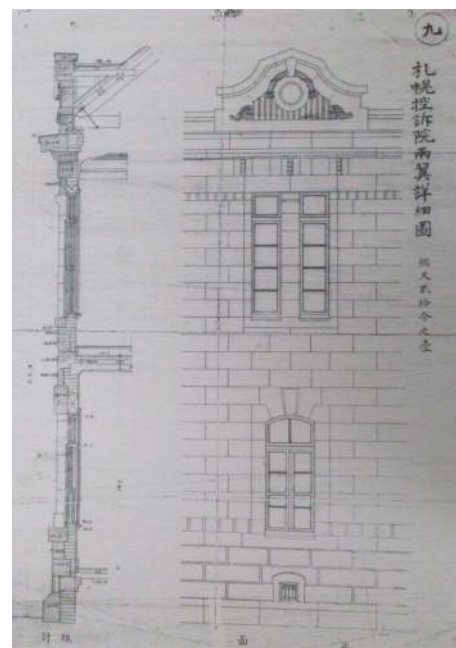


旧札幌控訴院の外壁は、一見石造のようですが、実は内側にレンガ、外側に軟石を積み上げた組積造で、2階の床や支持柱などには鉄筋コンクリートを使用するという混構造となっています。不燃性の建物の構造が変化して行った過程が、反映されています。また、南区石山等で産出する札幌軟石を使用した庁舎としても、貴重な遺構と言えます。外観の全体的な印象は重厚でやや簡素ですが、個々に見て行くと、車寄せの上には、裁判所にちなんで、目隠しをした女神や天秤と剣のレリーフ、丸みを帯びた「院訴控幌札」の文字が彫られ、さらに、壁面に施された八咫(やた)の鏡やギリシャ雷紋の装飾、玄関の3連アーチ、回り階段と2本の円柱、スタンドグラスや天井の中心飾りなど、古典的なモチーフと大正モダンの意匠が建物の内外に配されています。

控訴院は、最も多いときには、全国に8か所設置されていましたが、当時の庁舎が現存するのは、札幌と名古屋の2か所だけで、名古屋の庁舎は国の重要文化財、札幌の庁舎は登録有形文化財となっています。



当公文書館に収蔵されている、大正12年(1923年)の札幌控訴院庁舎新営工事設計図には、青図や第二原図などがあり、正面建図や平面図のような全体的な図面の他、両翼詳細図や玄関及応接室詳細図、法廷詳細図のような各部分の詳細図、さらには、鉄筋配置図、2階床根太配置図、小屋梁配置図のような建物の構造を示す図面も含まれています。また、建築書類や会計記録などの工事関係文書からは、例えば、どのような箇所に、どのような材料が使われたかということを読み取ることができます。



当公文書館の前身である文化資料室は、平成18年(2006年)3月まで、旧札幌控訴院の庁舎の一部を使用していましたが、現在の札幌市資料館には、控訴院時代の法廷を復元した刑事法廷展示室や、まちの歴史展示室、おおば比呂司記念室、ミニギャラリーなどがあるほか、3年に1回開催される札幌国際芸術祭(SIAF)の拠点として、SIAF ラウンジと SIAF プロジェクトルームが設置されています。

このように、札幌市では、旧札幌控訴院の庁舎を、今後も積極的に利用して行く方針ですので、「旧札幌控訴院工事関係資料」は、建築当時の状況を知るだけでなく、建物を保存・活用して行く上でも、有用な情報を得られる資料と言えます。

(公文書館長 綿貫真人)

# 公文書にみる「新一年生お母さんのつどい」

(2016年11月5日 さっぽろ閑話改稿)



今年度、当館に受け入れをした公文書に「新一年生お母さんのつどい」事業簿冊があった。地域のコミュニティや1970年代から1990年にかけての市民活動を知ることができるものとして、さっぽろ閑話では、この事業で造られた施設・物件を中心に紹介したが、本稿はその概要を簡単に報告したい。

昭和48年、当時の板垣武四市長は、新成人が市政に関心をもち、参画すること、また母親が青少年の健全育成に関心を深めるよう「新成人・新入学児童の記念施設を新設」する方針を決めた(『広報さっぽろ』昭和48年5月号)。その事業名が「はたちのつどい」と「新一年生お母さんのつどい」だった。「はたちのつどい」は、成人式を迎えた青年が集まり地域や区の検討会を経て、全市の意見をまとめ、市費で記念物件を実現した。「新一年生お母さんのつどい」も同様に、新一年生をもつ母親からアイデアを集約し記念となる施設や物件を残した。またアイデアを集約するなかで母親のサークルが生まれ、キャンプや芋掘りなど母と子のレクリエーション活動も行われていた。

アイデアの集約方法は、「アイデア会議」チラシを配布し参加者を呼びかけ、各区で会議を開催し三つまで案を絞り、全市集約会議にて一つにまとめ予算内に実現させる。その案から造られる施設・物件は、次年度つまり一年生が二年生になるときに完成した。「(市が想定した記念となる)施設は、子ども全体や市民のすべてが利用できるもので、記念として長く残るような特徴のあるもの、例えば小公園、植樹、彫像、スポーツ施設などが考えられます。」(『広報さっぽろ』昭和48年5月号)としていた。具体的に実現された物件・施設はどのようなものだったのか、「新一年生お母さんのつどい」事業で造られた施設・物件一覧表を見てみたい【表1】。

【表1】「新一年生お母さんのつどい」事業で造られた施設・物件一覧

西暦	年度	施設・物件	区	場所	2016年施設・物件の状況	
1	1973	昭和48年	記念植樹	不明	市内小学校	不明
2	1974	昭和49年	記念の森	豊平区	平岸高台公園	現存
3	1975	昭和50年	愛の鐘	中央区、北区、東区、白石区、豊平区、南区、西区	中島公園、屯田中央公園、ひのまる公園、万生公園、精進河畔公園、藻岩下公園、発表河畔公園	撤去
4	1976	昭和51年	記念像「のびゆく子等」	中央区	中島公園内彫像場前	現存
5	1977	昭和52年	トンカチ広場	西区	農試公園	現存
6	1978	昭和53年	はらっぱのある森	中央区	藻岩山ロープウェー下	終了
7	1979	昭和54年	タイヤ広場	西区	琴似公園(12年3月名称変更し二十四軒公園)	撤去
8	1980	昭和55年	未来のスペリ台	厚別区	馬場公園	現存
9	1981	昭和56年	立体迷路「ごろくのとりで」	北区	篠路公園(49年3月名称変更し太平公園)	改修
10	1982	昭和57年	ゆめの木57(いーな)	東区	北園公園	撤去
11	1983	昭和58年	UF058(ゴーチ)	南区	十五島公園	現存
12	1984	昭和59年	59ひろば(こく)	豊平区	精進河畔公園	撤去
13	1985	昭和60年	60の冒険(ムツオ)	北区	百合が原公園	撤去
14	1986	昭和61年	記念植樹とタイムカプセル	南区	芸術の森	終了
15	1987	昭和62年	セーラーズ62 2000年未来号	白石区	万生公園	改修
16	1988	昭和63年	カリバー63	西区	農試公園	現存
17	1989	平成元年	シーソータワー「ゆめ科学'89」	南区	藤野みどり公園	現存
18	1990	平成2年	90レミのはらっぱ	清田区	平岡南公園	改修

施設・物件は、昭和48年から平成2年まで毎年一つずつ計画され、合計18点造られた。昭和48、49、53、61年度は植樹、昭和50年度は帰宅を促すチャイム「愛の鐘」、昭和51年度は彫像「のびゆく子等」、昭和52年度は工作の作業場「トンカチ広場」、昭和53年度は憩いの場「はらっぱのある森」、昭和61年度はタイムカプセル、それ以外の年は公園遊具が造られている。

施設・物件の内容に植樹と公園遊具が多いのは、昭和47年の「都市公園整備第一次五年計画」の策定、昭和50年の「児童公園100カ所作戦」、昭和52年に「札幌市緑化推進条例」が制定されていることと関係しているだろう。札幌を緑豊かな街にするため、植樹を促し更にその管理も市民が協力し合うことを求めている。

また、「新一年生お母さんのつどい」アイデア会議では、子どもの遊び場の要望が大きなウェイトを占めていた。自動車の増加、交通の混雑、宅地造成などが急速に進み、生活道路で遊ぶことが難しくなってきたため、子どもたちが安心して遊べる広場が欲しいという声も高まっていた(『広報さっぽろ』昭和48年9月号)。

ここで改めて施設・物件の設置場所に注目したい。【表1】を見ると設置区の偏りがあるように見えるが、全市のバランスを取って配置されていた。昭和56年度立体迷路「ごろくのとりで」設置に関する起案には、「全市的均衡を勘案し、北区篠路公園に決定した」(「昭和56年度 新一年生お母さんのつどい記念事業工事関係綴 「ごろくのとりで」(篠路公園)」札幌公文(2016-0338))。昭和50年度「愛の鐘」の公文書(「昭和50年度 新一年生お母さんのつどい記念事業工事関係

綴「チャイム（愛の鐘）」(中島公園ほか)」札公文(2016-0176))には、全市各区一つずつ設置すると書かれているが、「愛の鐘」は厚別区、清田区、手稲区にはない。これは「愛の鐘」設置当時、まだ分区していなかったためである。同様に、昭和55年度「未来のスベリ台」の設置時は白石区だったが、平成元年に分区し厚別区となった。また、平成2年度「'90ドレミのはらっぱ」の設置時は豊平区だったが、平成9年に分区し清田区となった。これは郊外に宅地造成が増え人口が増加していたことや、この二つの公園の隣に小学校があることと関係しているだろう。

2016年現在、この18点の施設・物件は現存しているのだろうか？ 9月から10月にかけて調査し、それを【表1】の右端の欄にまとめた。一般的に公園遊具は、老朽化し危険性があると判断されると各区の維持管理課によって撤去、改修されるが、なぜ撤去されたのか、改修されて残ったのか、その理由が明白なもの多くない。市の担当者に確認ができたものに、平成2年度「'90ドレミのはらっぱ」(平岡南公園)【写真1】がある。



【写真1】「'90ドレミのはらっぱ」のラッパ型遊具(1991年)

これはラッパの形をしたスベリ台を中心とした遊具である。平成23年に市の担当者が点検をしたところ老朽化がみられたため改修が計画された。この公園に隣接する平岡南小学校関係者に相談したところ、「ラッパのイメージが残るといい。」と言われたという。ラッパの形をしたスベリ台は、子ども達に人気があったのだろう。例えば、「新一年生お母さんのつどい」事業対象物ではないが、北区太平公園にはタコの形をした遊具がある。近隣の子ども達には「タコちゅう公園」と呼ばれ大変人気があった。平岡南公園も「ラッパ公園」と呼んでいた子ど

もがいたというから、改修後もラッパの形をしたスベリ台としてその形が継承されたのだろう【写真2】。



【写真2】「'90ドレミのはらっぱ」の改修されたラッパ型遊具(2016年)

市は事業開始時に、「記念として長く残る」ものをと謳っていたが、子どもの遊び場となる遊具を造りたいという母親の要望と限られた予算内に物件を実現させることは難しく、「当初、強化プラスチック製を予定していたが、予算ワクを超えることから、北国に最適といわれる木製に切り替えた」(『北海道新聞』昭和57年7月20日『ごろくのとりで』登場)という母親達の悩む姿も目に浮かんでくる。造られてから20年以上経つと、施設・物件は当然老朽化してしまうものだが、市は「記念として長く残る」ものを想定していたのならば予算を見直す、または長く残るものに案を変更すべきだったのかもしれない。

施設・物件を調査していると、筆者も子どもの頃遊んでいたシーソータワー「ゆめ科学'89」や「未来のスベリ台」もこの事業で造られたものだったと、今回改めてその由来を知ることになった。先日、母にこの事業について尋ねると、「新一年生お母さんのつどいでキャンプに行ったよ。」と淀みなく答えた。母だけではなく、同世代の女性に尋ねたところ事業名を覚えていた。平成3年度で記念物件を作る事業は終了したが各区のサークル活動はこの後も各区で展開された。施設・物件はなくなりつつあるが、サークル活動に参加した母親達の記憶に残っている。振り返ると、この事業はコミュニティをつくるものとして機能していたと言えるのではないだろうか。平岡南公園が「ラッパ公園」と子ども達に呼ばれたように地域に根付いているものは市内にいくつか存在している。

(公文書館専門員 中根有理)

# 雪まつり第1回の開催 は、2日間、1日？

(2016年2月6日 さっぽろ開話改稿)



## 1. 雪まつりのルーツは？

昭和25年2月大通で雪まつりが開催された。1回目の雪まつりである。この雪まつりは、明治31年から始まった札幌中学(現在の札幌南高校)の雪戦会、大正14年から中島公園の池で始まった氷上カーニバル、そして昭和10年から始まっていた小樽市立北手宮小学校の雪まつり、3つの行事をルーツにしていると言われている。栗谷川健一がデザインした雪まつりのポスターを見ると氷上カーニバルの影響が強いことが見受けられる。

3つのルーツを持つ雪まつりは、開催の頃に札幌観光協会の事務局長だった近藤直人が昭和14年頃に北手宮小学校の雪まつりを見て発案したが、戦争のさなかであったため実現しなかった。24年12月に近藤が敗戦後の市民のリクリエーションのために、再度理事会で提案して実現した(札幌観光協会『観光札幌－札幌観光協会30年記念誌』1966年刊)。なお当時札幌市の経済部長として理事会のメンバーでもあった板垣武四が、ニュース映画で新潟の小学校の雪像づくりを見て発案したという話(板垣武四『思い出すま』1992年刊)もある。

## 2. 初めてのさっぽろ雪まつり

初めての雪まつりは、昭和25年2月18日に大通西7丁目を会場として、6基の雪像ではじまった。作成したのは当時の中学生や高校生で、坂垣道が指導した北辰中学の「バルザック」、「セザンヌのモニュマン」、向陵中学の「生徒の首」、北海高校の「裸像(蹲【かが】めるヴィナス)」、(札幌)工業高校の「ミロのヴィナス」、道二高(西高)の「罫(ひぐま)」であった。札幌鉄道局が札幌駅前にも作ったという話もある。

2月18日のプログラムは10時半開会、12時までは歌謡コンクール予選、1時から2時はタンブリング、2時から3時はスクエアダンス(昼の部)、3時から4時までは演芸大会、5時から5時半はドッグ

レース、5時半から6時半はスキー仮装行列、6時半から7時までスクエアダンス(夜の部)、7時から8時まで歌謡コンクール、8時から9時までは映画『銀嶺の果て』の予定であった(昭和25年2月18日付北海タイムス)。

初めての雪まつりに関する記述のある記念誌類には、夜のスクエアダンスや映画会になると人が集まりすぎて身動きがとれないほどとなり負傷者が出る気配となったので中止したとあったり、夜のスクエアダンスの頃から人が集まりすぎて30分で中止、映画会も上映途中で映写台が観客に押しつぶされて中止となった(『さっぽろ雪まつり20年の歩み』1970年刊)。夜のスクエアダンスの時に詰めかけた観衆が場内になだれ込み一時中断したが、夜9時頃まで続けられた(昭和25年2月19日付北海道新聞)ともある。この頃の市民が望んでいたものがよく理解できる様子である。

## 3. 1回目と2回目の雪まつりの開催日

以上のように最初の雪まつりは、盛況の中で終了したが、第1回とは表記されなかった。しかし翌年開かれた雪まつりは、はじめから第2回と銘打って行われた。そして日程も、雪まつりの記念誌を見るとどれも1月26、27日となっているが、プログラムを見ると、様々な会場やイベントで1月25日～2月4日の間で実施している。それらを最初の雪まつりの日程の報道や報告と比べてみる。

表1 記念誌等での開催日比較

記念誌・新聞報道・公文書など	昭和25年(初回)	昭和26年(第2回)
さっぽろ雪まつりの歩み	2月18日	1月26、27日
さっぽろ雪まつり20年の歩み	2月18日	1月26、27日
さっぽろ雪まつり30年、世界へ	2月18日	1月26、27日
さっぽろ雪まつり30年史	2月18、19日	1月26、27日
創造 さっぽろ雪まつり40回記念写真集	2月18、19日	昭和26年1月26、27日
さっぽろ雪まつり50年	2月18日	昭和26年1月26、27日
弘報さっぽろ	2月18、19日開催予定記事 2月18日だけ開催報告	1月26～28日開催予告記事 1月26、27日開催報告
北海道新聞	開催紹介記事は2日間 イベントを紹介した記事は18日分だけ	紹介記事は1月26日～2月4日開催
各年『事務概況』(特定重要公文書)	2月18日	1月26日～2月4日

最初の雪まつりは、ポスターにある開催日は2月18、19日となっていた。弘報や新聞の開催を知らせる記事では、その2日間の開催予定となっている。

最初のポスター



しかし、30年記念誌と40年記念誌を除いて記念誌類や弘報・新聞などの開催を報告した記事では1日(2月18日)だけの開催となっている。実は30年記念誌にはじめてポスターが掲載されていることを考えるとそれを参考に開催日を2日間に変更したようだ。それ以前の記念誌類では、開催の当事者たちの記憶で1日とし、50年記念誌は、雪まつりの座談会を開催したなかで1日だけに訂正したのであろう。最初の雪まつりは、2月18日の1日間の開催だったのである。

第2回の日程は、記念誌類では1月26、27日となっているが、『弘報さっぽろ』は開催予告記事には26～28日だが、その報告には26、27日の2日間である。新聞と事務概況は1月26日～2月4日までとなっている。しかし『第2回札幌雪まつりプロ

第2回札幌雪まつりプログラム	
期日 昭和26年1月25日～2月4日	
一般行事	特別行事
26日 13:00 雪まつり子供大会 市公会館	25日 13:30 第22回宮様スキー大会 豊平区宮前
16:00 雪のパレード 市公会館前	19:30 森三時雪 市公会館
27日 13:00 スクエアダンス会 大通西7丁目	26日 19:30 新行次、レーズ、アキラ
14:00 ドッグレース 大通西7丁目	27日 10:00 奥陸上レーズ(市公会館前) 観望台
15:00 観光マラソン大会 市公会館	10:00 新行次、レーズ、アキラ
13:30 タンブリング大会 大通西7丁目	28日 10:30 奥陸上レーズ(市公会館前) 観望台
12:00 雪甲パレード大会 大通西8丁目	15:00 閉会式 市公会館
13:00 雪甲パレード大会 大通西8丁目	氷上カーニバル 2月28日 中島公園
15:00 雪まつり文化火打場 大通西8丁目	1月25日 札幌市街雪まつり協賛サマースタンプラリー
13:30 歌謡コンクール大会 大通西7丁目	1月26日 定山温泉旅館前雪まつり協賛サマースタンプラリー
16:00 文化展雪の教室イベント	
2月4日 雪の芸術展 大通西7丁目	
1月26日	
1月28日	

第2回雪まつりのプログラムを記したピラ

グラム』のピラでは、1月25日～2月4日となっている。第2回については、イベントごと会場ごとにより日程が異なっている。弘報の矛盾した記事は理由不明である。それに対して最初の雪まつりは、2日間予定であったのが、何故か1日で終了したと考えていいようである。

#### 4. 最初の雪まつりの2日目は？

最初の雪まつりに関する資料から考えると、どれも18日のイベントを紹介するが、19日分は何も記さない。第2回雪まつりのように、近接して行われた宮様スキー大会(2月17～19日)や氷上カーニバル(2月5日)を日程にいれていないし、多くのイベントを様々な会場でしているわけでもない。そうすると1日分の報告しかないことについて何らかの事情があったように推察できる。

その理由はいくつか考えられる。まず思いつくのは、2日目はイベントをせずに雪像の観覧だけだったため、雪祭りの実施報告には載せなかった可能性である。しかしそれは開催する前からの予定であるからそのように報告すればいいことで、1日開催だけのように報告する必要はないであろう。

次に思いつく理由は、当時の社会状況である。当時日本は侵略戦争の敗戦でGHQによる占領時代であった。そのときに1日目の最後頃に人が集まりすぎて起こった状況は、より大きな事故に陥りそうな危険性をもった。そのためGHQは、そのような事故が起こる前、事件になる前に、2日目の雪まつりを中止させる指令を出した。この場合、新聞も役所もその事情を記すことが出来ず、1日開催と報告したのではなかろうか。そうすると1日目最後の映画会もGHQが現場で中止指令を出したため途中で中止になった可能性も出てくる。

最初の雪まつりの日程についてはまだ考察が必要である。(公文書館職員 榎本洋介)

【表1出典】:『さっぽろ雪まつりの歩み』(1970年刊)、『さっぽろ雪まつり20年の歩み』(札幌市、昭和44年9月)、『さっぽろ雪まつり30年、世界へ』(すすきのタイムス社、昭和54年1月)、『さっぽろ雪まつり30年史』(さっぽろ雪まつり30年史編集委員会、昭和54年2月)、『創造さっぽろ雪まつり40回記念写真集』(さっぽろ雪まつり実行委員会、平成元年3月)、『さっぽろ雪まつり50年』(さっぽろ雪まつり実行委員会、

平成11年2月)、『弘報さっぽろ』25年分は4号(昭和25年2月15日)と5号(昭和25年3月1日)、26年分は26号(昭和26年1月15日)、27号(昭和26年2月1日)、『北海道新聞』25年分は、昭和25年2月10

日、2月19日、26年分は昭和26年1月23日。『事務概況』とは札幌市役所の各課が1年間の業務を報告したもので、表には昭和25年と26年を利用。

## はじめての公園・偕楽園

(2016年12月10日 さっぽろ閑話改稿)

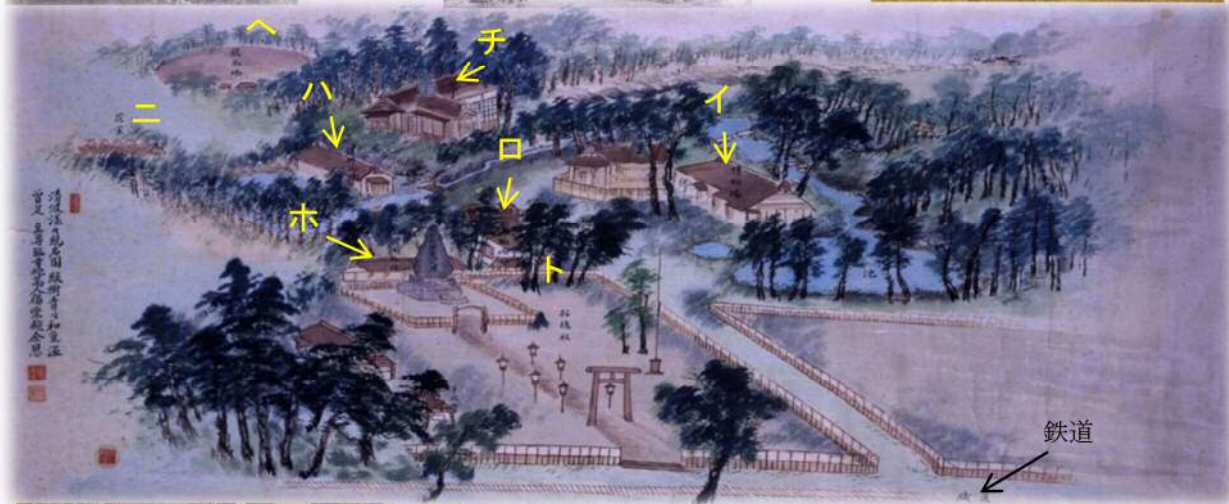
㊦競馬場



㊦製物場・㊦鮭ふ化所



㊦清華亭



㊦屯田兵招魂碑



㊦博物館

【図1】「偕楽園之図」(明治15年頃)

札幌市公文書館所蔵

札幌で最初の公園偕楽園は、現在の「偕楽園緑地」(北区北7西7付近)を中心とした一帯に、1871(明治4)年、開拓判官岩村通俊が、「遊観ノ所」として設置しました。当時の様子について『開拓使事業報告』には「高樹鬱蒼清水涌出天然の雅致アリ」、高木が鬱蒼と茂り、湧き水が流れでる自然郷であったと記されています。

また同年、開拓使の農園も園内に開設されまし

た。その農園はのちに札幌官園、育種場と呼ばれ、農業試験場として、適地適作を求めて数百種の植物を栽培し、年々その規模は周辺に拡大していきました。さらに、開拓政策の普及や移民を教育する目的で、この地に勸業施設が造成・整備されました。

それでは、明治15年頃の様子といわれている「偕楽園之図」(図1)を手がかりに、主な施設の取

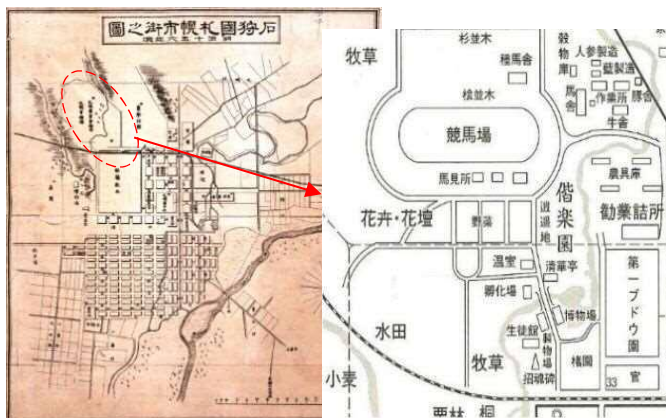
組みを見てみましょう。

①**博物館** 1877年に設けられ、北海道の動植物、鉱物などの自然資料や、先住民族であるアイヌ民族資料などを、一般に公開していました。開拓使の活動成果を示す、缶詰や酒類などの産業資料も収集・展示され、博覧会の事務も担当していました。北海道の博物館の起源といえるでしょう。

②**製物場** 北海道最初の工業試験場・農産物加工試験場のような施設で、1878年に設置され、澱粉・砂糖の製出など、試験内容は多岐にわたります。

③**鮭ふ化所** 1879年に、シャクシコトニ川を利用し、ふ化室や池を併設し新設しました。ふ化試験は前年の1878年、仮設のふ化室を使用して開始されました。北海道におけるふ化事業の発祥の地といえます。現在は、この場所に川はありませんが、当時はサケが遡上していました。

④**花室（温室）** 1878年に、お雇外国人ルイス・ベーマーの要望で設置されました。北海道に普及する花卉(かき)、果樹や穀物種子培養を目的とし、地下室を設け、球根、宿根草や野菜を冬期間貯蔵しました。さらに野菜や果実の冬期保存に必要な土室(むろ)も併設し冬期貯蔵試験も始めました。



【図2】「石狩国札幌市街之図」  
(明治15・16年頃)に加筆

【図3】『札幌の歴史』52号p33  
より抜粋

⑤**生徒館** 開拓使が外国技術を計画的・組織的に導入し、農業分野の技術者として養成した若者たちの施設と思われます。

⑥**競馬場** 1878年、現在の北海道大学農学部辺りに、楕円形馬場が常設され、馬産奨励の趣旨から、官業競馬が催されました。毎年6月札幌神社祭、8月屯田兵招魂祭日には各二日間、祭典行事として競馬が行われ賑わいました。

⑦**屯田兵招魂碑** 西南戦争で戦病死した琴似・山鼻の屯田兵を慰霊するために、1879年に建立されました。

⑧**清華亭** 1880年に貴賓接待所として建設され、建物と同様に、庭園についても築山やローン(芝生)また花卉も多く植えるなど和洋折衷でした。1881年、明治天皇の北海道行幸では、休憩所として使用された唯一現存する施設で、札幌市指定有形文化財となっています。

この頃の借楽園は、単なる散策憩いの場にとどまらず、勸業施設が林立する北海道の産業振興の拠点といえるでしょう。

しかし、開拓の進展とともに規模の拡大や役割の多様性が生じ、イベント広場としては狭小のため、第1回農業博覧会は大通で開催され、博物館や鮭ふ化所が、農学校(現・北大)の附属植物園や千歳へ、競馬場や屯田兵招魂碑は、中島公園に移設されるなど、それぞれ分離発展していきました。とくに明治20年以降、中島公園・大通などが本格的に整備され、しだいに借楽園の役割は薄れていきました。

借楽園については、まだ解明できない部分が多くあるようです。

(公文書館専門員 蔵満和泉)



さっぽろ市  
02-A01-16-1868  
28-2-1095

公文書館だより  
発行

第4号・2016年(平成28年)12月

札幌市公文書館 〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目

Tel・公文書館事務室 011-521-0205 閲覧室 011-521-0207 Fax 011-521-0210

E-mail・kobunshokan@city.sapporo.jp URL・http://www.city.sapporo.jp/kobunshokan/